

2022年を振り返って

生誕150年スクリャービン
とヴォーン・ウィリアムズ
生誕100年名指揮者スウィトナー

プログラム

今年も残り一ヶ月を切りました。振り返ってみますと、新型コロナの影響でまたしても予定通り年12回の開催は出来ませんでした。6月に奥田佳道先生、9月に新忠篤先生をお迎えし、3年ぶりの講演会を開催することが出来ました。毎年時間を割いているアニヴァーサリー特集は今年はセザール・フランクのみでしたので、今年最後のCDコンサートでは取り上げることが出来なかった作曲家、演奏家をまとめてご紹介することにしました。スクリャービンは1872年ロシアのモスクワで法律家の父とピアニストの母の元で生まれました。しかし生後間もなく母が亡くなり、叔母に育てられながら5歳からピアノを学び始めました。1888年16歳でモスクワ音楽院に入学、ピアノをサフォノフ、作曲をタニエエフとアレンスキーに師事、自作のピアノ曲によるリサイタルを開いて行くうちに出版者に認められ、ヨーロッパ各国を演奏旅行して成功を収めて行きました。作曲家としては初期の作風はショパンの影響を受けたピアノ曲が多くを占めました。ある時期を境に大きく変わって行きます。1900年以降、神智学や神秘主義思想へ傾倒して行き、通常の和声法から逸脱した「神秘和音」を活用し、神秘性の強い音楽を目指して行きました。今日は後期ロマン派の最も個性的な作曲家スクリャービンの名曲2作をお聴きください。ヴォーン・ウィリアムズは1872年イギリス、ダウンアンプニー生まれ。7歳からヴァイオリンを習いケンブリッジ大学、王立音楽院で音楽と歴史を専攻、1907年にはラヴェルの教えを受けました。作曲家としてデビューしたのもこの頃で、既に35歳でした。生涯9つの交響曲や管弦楽曲、協奏曲、合唱曲や教会音楽まで多くの作品を残しましたが、晩年の10年間で4曲の交響曲を書き、最後の第9番は85歳の作という大器晩成型の作曲家でした。自国の民謡や印象派の影響を受けながら、独自の個性的なスタイルを確立、イギリスを代表する作曲家のひとりに数えられています。日本ではN響への客演でおなじみの名指揮者オトマール・スウィトナー（1922～2010）はオーストリアのインスブルック生まれ。ザルツブルク・モーツアルテウム音楽院で学び、指揮をクレメンス・クラウスに師事しました。1941年に指揮デビュー。1960年にドレスデン国立歌劇場と管弦楽団の音楽総監督、1964年からはベルリン国立歌劇場の音楽監督となり1990年までの26年間その地位にありました。1971年NHK交響楽団を指揮して初来日、以来毎年のようにわが国を訪れ、73年には名誉指揮者になりました。手兵ベルリン国立歌劇場管弦楽団とは77年、78年、80年（歌劇）、81年、83年（歌劇）、84年、87年（歌劇）、88年と計8回来日。常に生き生きと伸びやかにうたう演奏スタイルで、わが国では人気の高かった名指揮者でした。（中川）

アレクサンドル・スクリャービン(1872.1.6～1915.4.27):

ピアノ協奏曲嬰へ短調Op.20

エフゲニー・コロリオフ(ピアノ)

ダニエル・ナサレス指揮ザールブリュッケン放送交響楽団

(1982.1.29 ザール放送スタジオでのLive)

交響曲第2番ハ短調Op.29～ 第1楽章から、第5楽章

ロマン・コフマン指揮ザールブリュッケン放送交響楽団

(1996.1.19 ザールブリュッケン、コンGRESハレ大ホールでのLive)

レイフ・ヴォーン・ウィリアムズ(1872.10.12～1958.8.26):

グリーンズリーヴスによる幻想曲

アンドレ・プレヴィン指揮ロンドン交響楽団

(1971.4.27 大阪フェスティバルホールでのLive)

*** 休憩 ***

レイフ・ヴォーン・ウィリアムズ(1872.10.12～1958.8.26):

揚げひばりーヴァイオリンと管弦楽のためのロマンスー

ヒラリー・ハーン(ヴァイオリン)/大植英次指揮スウェーデン放送交響楽団

(2006.2.22 ストックホルム、ベルワルドホールでのLive)

アントニン・ドヴォルザーク(1841.9.8～1904.5.1):

交響曲第8番ト長調Op.88

オトマール・スウィトナー指揮ベルリン国立歌劇場管弦楽団

(1978.11.9 新宿厚生年金会館大ホールでのLive)

曲目解説

スクリャービン：ピアノ協奏曲嬰へ短調作品20

ロシアの作曲家スクリャービンは、同じロシアのラフマニノフより一つ年上ですが、ラフマニノフが1917年のロシア革命後、アメリカに亡命して20世紀音楽の変革を気にせず、19世紀語法で書き続けて1940年代まで生き延びたのに対し、スクリャービンは「神秘和音」と呼ばれる大胆な語法を生み出しながらも、革命2年前にこの世を去ってしまいました。**ピアノ協奏曲嬰へ短調**はまだ19世紀の様式が残る1896年24歳の時の作品で、1897年11月23日スクリャービン自身のピアノで初演されました。リムスキー=コルサコフはこの作品の管弦楽のバランスの悪さを指摘、改訂を申し出ますが、スクリャービンはこれを拒否して、自身で一部修正を加えました。ショパンの影響も見られますが、リズムやヴィルトゥオーソ的なピアノ表現はスクリャービン独自のもので、ロマンティックな曲想、センチメンタルな叙情性はロシア的な美しさが際立っています。もつと演奏されても良い隠れた名曲の一つです。

第1楽章 アレグロ 第2楽章 アンダンテ 第3楽章 アレグロ

スクリャービン：交響曲第2番ハ短調作品29

スクリャービンは、生涯5曲の交響曲を作曲しました。第1番は終楽章に独唱、合唱を加えた6楽章構成。神知学（神秘的な直感や瞑想、啓示などを通じて、神と結びついた神聖な知識の獲得や高度な認識に達しようとするもの）への傾向をはっきり示し始めた交響詩風の第3番。恍惚と歓喜を独自の音楽語法で表現した単一楽章の第4番。そして第5番はピアノと混声合唱が加わった色彩効果を狙った単一楽章の交響曲というように、どれもが従来の伝統的な交響曲形式からは逸脱した自由な語法で書かれています。第2番はモスクワ音楽院でピアノの教授職を務めていた1901年の作曲で、初期の作品から変革へ移行していく過渡期の作品です。1902年1月12日、サンクトペテルブルクで作曲家リアードフの指揮で初演されましたが、不評に終わりました。第1楽章と第2楽章、第4楽章と第5楽章は続けて演奏される全5楽章構成で、一見つかみ所のない音楽に感じますが、全体は統一主題によって結ばれ、終楽章は長調に変化した華麗な音楽で締めくくります。スクリャービンの魅力が随所に聴かれる名曲です。

第1楽章 アンダンテ 第2楽章 アレグロ 第3楽章 アンダンテ
第4楽章 テンペストーソ 第5楽章 マエストーソ

ヴォーン・ウィリアムズ：グリーンズリーヴスによる幻想曲

スクリャービンと同じ1872年、牧師の子としてイギリスで生まれたヴォーン・ウィリアムズは1958年に86歳で亡くなりますが、晩年の10年間に4曲の交響曲やテューバ協奏曲を含む多くの重要な作品を発表し、年とともにますます創作活動を充実させて行きました。残念ながら日本ではエルガーやホルスト、ブリテンなど他のイギリスの作曲家に比べ知名度では劣りますがイギリス音楽の伝統を継承しながら、大胆で急進的な語法を加えた作風で、イギリス音楽界の重鎮として尊敬を集めた大家でした。1934年作の**グリーンズリーヴスによる幻想曲**は、もともと16世紀から発祥していた民謡「グリーンズリーヴス」として知られる旋律を歌劇「恋するサー・ジョン」の間奏曲として使用しましたが、この部分を独立させてまとめたのがこの作品です。1934年9月27日自身の作曲者指揮で初演されて以来、愛され続けてきた名曲です。今日演奏される管弦楽版はラルフ・グリーンヴスが編曲したものです。

ヴォーン・ウィリアムズ：揚げひばりーヴァイオリンと管弦楽のためのロマンスー

「揚げひばり」は、19世紀の小説家兼詩人ジョージ・メレディスの詩「揚げひばり」を音楽的に解釈したもので、「ひばりは空に舞い上がり、輪を描き始める。ひばりはとぎれることのない多くの輪のある、銀の鎖のような音をしたたり落とす……」といった内容で、1914年に書かれ、1920年に改訂版を完成させました。1921年6月14日、ロンドンで名女流ヴァイオリニスト、マリー・ホールの独奏、エードリアン・ポールの指揮で初演され、マリー・ホールに献呈されました。美しい牧歌的な叙情にあふれた名曲です。

ドヴォルザーク：交響曲第8番ト長調作品88

チェコの大作曲家ドヴォルザークは9つの交響曲を作曲しましたが、生前に出版されたのは第5番以後の5曲で、その後残りの4曲が出版され、年代順に整理されたため、昔第4番と言われていた交響曲が第8番、第5番は第9番「新世界から」になりました。第8番は1889年秋にチェコのヴィソカー村の別荘で完成され、1890年2月2日、プラハのルドルフィルム（芸術家の家）で作曲者自身の指揮で初演されました。出版の際に従来の出版社との折り合いがつかず、イギリスのノヴェロ出版社から出されたため、時に「イギリス」の別名で呼ばれることもありましたが、曲の内容とは一切関係ありません。曲は徹底してボヘミア風の民族色の強いもので、独創性にあふれ、生気に満ちた力感や親しみやすい曲想など、「新世界」同様に高く評価されている傑作です。

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ 第2楽章 アダージョ
第3楽章 アレグレット・グラツィオーソ 第4楽章 アレグロ・マ・ノン・トロツポ